

# 平成26年度

## 出雲市自然環境調査の結果を紹介します

出雲市では、市内の自然環境の状況を把握し、各種の施策に活用するため、野生生物を対象とした調査を継続的に実施しています。平成26年度は、出雲市全域の河川の中で比較的資料が少なかった斐川地域について、河川に生息する水生動物と水生植物の調査を行いましたので、その成果の概要を紹介します。

### ■調査の対象

この調査では、市内の生物多様性を知るため、確認された生物をできるだけ記録するようにしています。この中には、レッドデータブック（注1）の掲載種や環境省が外来生物法（注2）で指定する特定外来生物（注3）や要注意外来生物（注4）が含まれています。

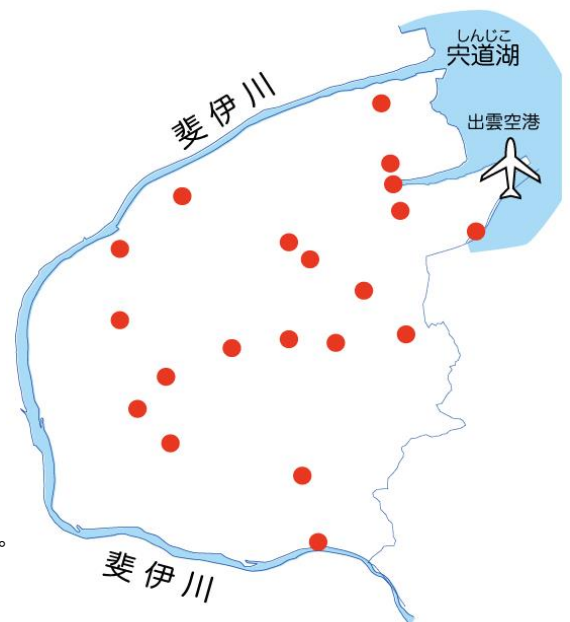
（注1） 絶滅のおそれのある野生動植物をまとめた資料。

（注2） 正式名は、特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律。  
この法律で特定外来生物や要注意外来生物が指定されます。

（注3） 特定外来生物に指定された生物は、その飼養、栽培、保管、運搬、輸入等が規制されます。

（注4） 要注意外来種には、外来生物法に基づく飼養等の規制はありません。

しかし、これらの外来生物が生態系に悪影響を及ぼす可能性があることから、その扱いには注意が必要です。



平成26年度の調査地点

### ■調査地域

斐川地域の水路や河川から20地点を選び、調査を行いました。

### ■確認された生物

調査で記録された生物の全種数は、106種です。その内訳は、哺乳類1種、爬虫類1種、両生類3種、魚類23種、巻貝11種、二枚貝2種、ヒル類1種、甲殻類8種、昆虫類39種、水草17種です。

## ■水生動物の調査

斐川地域の河川に生息する水生動物の生息状況について、調査を行いました。

希少種としては、島根県版レッドデータブックや環境省のレッドリストに掲載されている巻貝類6種（マルタニシ、オオタニシ、カワグチツボ、ミズゴマツボ、モノアラガイ、クルマヒラマキガイ）、甲殻類1種（ミナミヌマエビ）、昆虫4種（ムカシトンボ、キイロサナエ、クビボソコガシラミズムシ、コガムシ）、魚3種（サンインコガタスジシマドジョウ、ミナミメダカ、シンジコハゼ）、両生類1種（トノサマガエル）、爬虫類1種（ニホンイシガメ）が確認されています。

この中でシンジコハゼは、環境省のレッドリストや島根県のレッドデータブックに掲載されている希少な魚です。宍道湖の名前がある通り、宍道湖や宍道湖に流れ込む川に生息しますが、近年は減少していると言われています。

この他、巻き貝の一種であるクルマヒラマキガイは、島根県のレッドデータブックには掲載されていない種ですが、環境省のレッドリストや、中国地方（岡山県、山口県）、四国（高知県）、九州（鹿児島県と熊本県を除いた5県）の西日本各県のレッドデータブックに掲載されている希少種です。小さく目立たない貝ですが、この種が生息していることは、斐川地域の川の環境が良好であることを示す1つの指標となっています。

外来生物では、サカマキガイ、アメリカザリガニ、タイリクバラタナゴ、ヌートリアが確認されています。

ヌートリアは、環境省が外来生物法で指定する特定外来生物、アメリカザリガニとタイリクバラタナゴは、要注意外来生物です。また、国内の他地域から入った種（国内外来種）としてスゴモロコが確認されています。



シンジコハゼ



クルマヒラマキガイ

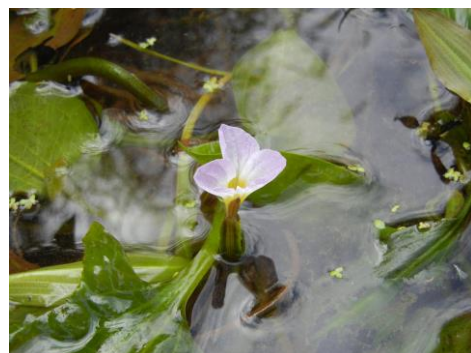


ヌートリア

## ■水生植物の調査

斐川地域の河川に生息する水生植物の生息状況について、調査を行いました。

希少種としては、島根県版レッドデータブックや環境省のレッドリストに掲載されているミズオオバコとミクリ属の一種が確認されました。ミズオオバコは、環境省のレッドリストだけでなく、島根県を含め日本全国の39都府県でレッドデータブックに掲載されている希少種です。もともとは、水田や水路に普通に生える、いわゆる水田雑草ですが、除草剤などの影響で減少したと言われています。斐川地域の川では、2カ所で確認されています。



ミズオオバコ

外来生物では、4種（ハゴロモモ、オオカナダモ、コカナダモ、ホテイアオイ）が確認されました。

この4種は、すべて環境省が外来生物法で指定する要注意外来生物です。

ホテイアオイは、金魚やメダカを飼う時に水槽や池に入れる水草として販売もされています。繁殖力が強く、野外の池や川などに放つと増えて、自然の生態系に影響を与えるので注意が必要です。



ホテイアオイ

## ■斐川地域の豊かな水辺環境と保全

斐川地域の川や水路からは、他の出雲市内の地域と同様に、多くの絶滅危惧種が確認されました。これは、斐川地域の自然の豊かさを示す証拠です。これらは、出雲市の大切な財産ですので、いつまでも残せるよう努力をする必要があります。

身近な生きものの中にも、いつの間にか減っていたり、姿を消したりする種もあります。

また、新たな外来生物が出現することもあります。このような自然の変化は、地元に住んでいる人にしか気づかないようなこともありますので、できるだけ多くの人々が知識や関心を持ち自然を守ることが大切です。